

## 駒ヶ根市文化財

名称	長春寺の磬
種別	歴史資料
所在地	赤穂下平
所有者	長春寺
説明	<p>磬(けい)は『広辞苑』によると「中国古代の楽器で、板や石をへの字形につくり、それを吊りさげて打ち鳴らす」とある。</p> <p>長春寺にある銅製(錫(すず)を含む)の磬は、肩先幅 21.0cm、裾先幅 24.5cm、上下最大幅 14.2cm。元来は中国の奏、漢時代の古い楽器で、字の示すように石製であった。後に金属製となり仏事に使用されるようになった。日本では正倉院に遺物があり、法具としての使用は 8 世紀頃といわれている。</p> <p>左右均等の山形をなし上縁左右 2 箇所(箇所)に紐孔をあげ、磬架に吊り下げ導師の右脇机に置き、法楽時、導師が中央の撞座(つきざ)を撞木(つき)で軽く打って始経等の合図に用いる。撞座をはさんで孔雀(くじゃく)が相対する意匠を用いている孔雀紋銅磬であるが、表と裏で意匠にわずかな相違が見られる。年代の銘はないが表面に「当寺開山俊雄法印」、裏面に「長春寺寄進」の打ち込み銘がある。俊雄は鎌倉時代末期、同寺の開山和尚である。</p>

名称	安楽寺の双盤
種別	歴史資料
所在地	赤穂上穂栄町
所有者	安楽寺
説明	<p>寺院で音楽用に用いる法具の一つ、字の示すように、2 個一組になっているが、これはその内の 1 個である。刻字の銘があり元禄 12 年(1699)とある。</p> <p>金銅製で、同じく音楽用に使う釣鉦鼓(つりしょうご)の変形であり、裏からみると浅い皿形状となる。鉦鼓と同じく、木製の架にかけて使用し、浄土宗など念仏系の寺院で双盤(そうばん)念仏をするとき、または開張などで御簾(みす)をあげるとき打ち鳴らし音響の効果をあげるという。</p> <p>法量は、直径 41.0cm、厚さ 11.5cm である。</p>



磬 (長春寺蔵)



双盤 (安楽寺蔵)